

アジアの絆を求めて

アジア・シルクロード音楽フェスティバル

アジアの絆を求めて

日本文化芸術交流の周年記念音楽のシルクロード

2012年の夏

NPOユーラシアンクラブ創設20周年



【日本・ウズベキスタン国交20周年記念コンサートツアーの伏線】

1980年代、加藤九祚、加藤晋平という二人の加藤教授と坪井清足、田中琢、松本秀雄、田中稔、田村晃一氏ら学界をリードする研究者と北方ユーラシア学会（江上波夫会長）を組織し、日ソ交換公文に基づくアルタイ山脈のパジリク文化（スキタイ）の凍結古墳や旧石器時代の洞窟遺跡、青銅器時代のアフアナシェヴォ・アンドロノヴォ文化遺跡、渤海港湾遺跡の発掘プロジェクト等（北方ユーラシア学会事業；大野遼理事・事務局長）に取り組む。

- ① **加藤九祚**・国際シルクロードアカデミー代表（国立民族学博物館名誉教授）の中央アジア仏教遺跡の発掘（民族学から発掘調査へ）
大野 遼・NPOユーラシアンクラブを創設、国家民族宗教を超えた活動の開始（学会からクラブへ）

② **加藤九祚** 1990年－1996年、ダルヴェルジン・テペ（B. トゥルグーノフ）、1996年－1997年、クラスナヤ・レーチカ（女性考古学者ガリャーチェヴァ）、そして1998年から始まったカラテパ発掘（S. ピダエフ）と継続してきた。ダルヴェルジン・テペやカラテパなど遺跡の近くに発掘拠点となる「加藤の家」を購入しての定点継続調査や2001年からは中央アジアの学術研究論文をさまざまな角度から紹介する「加藤九祚一人雑誌 アイハヌム」を毎年刊行し、研究者や中央アジアに興味のある人々の間で高い評価を得ている。現地でもウズベキスタン政府から友好勲章、テルメズ市から名誉市民の称号を授与された。最近考古学を通じたウズベキスタンと日本の親善に尽くしたとして日本国外務大臣表彰を受けた。

大野 遼 1990年 パジリク王墓発掘準備及び「ユーラシア文化センター」設立準備 1991年 アルタイ山脈発掘本番プロデュース1992年 アムール流域視察・ユーラシアンクラブ設立準備会発足、1993年2月11日九段会館に沿海州・アムール流域の少数民族代表14人を招へいして国際シンポジウム：ユーラシアンクラブ創設。…（以下別添ユーラシアンクラブ創設の20年）…1994年9月加藤九祚先生と2人でレンタカーでウズベキスタン・キルギス・カザフスタン旅行（最後の無国境旅行；以後国境検閲が始まる）…2000年12月特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ認証2001年9月イスマトフ氏とブハラ石畳で遭遇…2002年1月極東視察、シカチアリヤンコミュニティキャンプ合同委員会3月「ユーラシア紛争地特別フォーラム」開催（早稲田大学小野講堂）ウズベキスタンよりサシマコム招聘・公演（高橋一夫理事マネジメントで東京・埼玉・新潟にて4公演） 4月極東現地合同サポート委員会開催ウズベキスタン親睦旅行 発掘調査（加藤九祚先生・ウズベキスタン） 支援のベルトコンベア空輸 6月ユーラシア留学生フォーラム（イラン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、パキスタン/駒込和装学院）7月アジア・シルクロード舞姫の競演（板橋区立文化会館）…以降イスマトフ氏を数度招へい、テルメズ・カラテパ遺跡を加藤九祚先生の喜寿、傘寿、米寿に合わせて訪問した。

【気になり始めたアイルタム楽人像】

① ブハラの石畳で楽器を制作販売していたイスマトフ・ボホディル氏と偶然の出会い。ペルシャ系の音楽文化「サシマコム」（ウズベキスタンの楽典）を日本に紹介。日本でのアジア・シルクロード音楽フェスティバルにイスマトフ氏を何度も招聘しているうちに、アイルタム楽人像の中央で弦楽器を弾く女性が気になり始める。② 日本の音楽史におけるペルシャの音楽やトルコ、モンゴルの音楽の影響を考えるようになった。特に、中央アジアの仏教考古学史上のエポックとして知られるアイルタム楽人像が脳裏から離れなくなり、日本の音楽史とアジアの音楽史が形になってつながってきた。③ 15年にわたる「アジア・シルクロード音楽フェスティバル」「アジア・シルクロードミュージックキャラバン」を通して最後に知り合った最高峰の音楽家橋本岳人山、木村俊介、パンチャラマ、サラバンラマという4人と共に2010年11月 加藤九祚米寿の挑戦顕彰シンポジウム&フェスティバルを実施、カラテパ遺跡中庭、テルメズ考古学博物館のアイルタム楽人像前でのコンサートを実現、アジアの音楽史の最後の姿津軽三味線木村俊介さんのアイルタム楽人像前演奏を実現した。④ 翌年在ウズベキスタン大使館の要請を受け、2012年9月、日本ウズベキスタン国交20周年記念音楽のシルクロードツアーを実施、アイルタム遺跡の曲項四弦琵琶の最後の姿薩摩琵琶奏者首藤久美子さんのアイルタム楽人像前コンサート、タシケントの青年宮殿、ブハラ芸術大学、サマルカンドのレジスタン広場でイスマトフ氏や息子のバフチョル氏が副学長を務めるブハラ芸術大学の音楽家らとのジョイントコンサートを成功させた。

【日本・ウズベキスタン国交20周年記念コンサートツアーの意義】

加藤九祚先生の中央アジア仏教遺跡発掘の成果を顕彰し、長寿の挑戦を祝う形で、加藤九祚先生と中央アジア考古学史上画期的なアイルタム楽人像そしてブハラの音楽家たちを、日本とウズベキスタンをつなぐアジアの絆として、テルメズのカラテパ僧院伽藍、テルメズ考古学博物館アイルタム楽人像前、タシケントの青年宮殿、ブハラ芸術大学、そしてサマルカンド最大の観光地メドレセ中庭での日本・ウズベキスタン国交20周年コンサートが開催された。これはユーラシアンクラブ創設20周年記念コンサートでもあった。

時空を超えて交流1700年ウズベキスタンと日本



20-я годовщина установления дипломатических отношений

琵琶の種類	系譜	アジアでは	日本では	備考
曲項四弦琵琶	ペルシャ系	アイルタム楽人像 (琵琶を弾く女性)	薩摩琵琶	①琵琶の系譜：仏教伝来のルート＝北宋「事物起源」で「碎葉国所献」キルギスからもたらされたとあり、また「隋書」では、サマルカンドにはペルシャ系・インド系の琵琶があったと記される。 ②水神：アナーヒターの別称「ハラワティ」と弁才天「サラスヴァティ」は同源とされ、水の神にもペルシャ系とインド系がある。中央アジアで生まれた。 ③琵琶はペルシャの楽器・バルバットが起源、トルコ語でウード。ペルシャから中央アジア経由の曲項四弦琵琶とインド経由の直頸五弦琵琶が時期を変えて仏教と共に伝播した。
直頸五弦琵琶	インド系	弁才天（琵琶を弾く女神）；インドのサラスヴァティ（水と川、芸能学問の神様）	江の島弁才天；愛川町の中津川では、地下洞窟から地上に姿を現した伝説がある	
※ アムダリアを渡って、曲項四弦琵琶が演奏されたであろうカラテパ僧院伽藍遺跡、ペルシャ系四弦とインド系五弦の二種の琵琶があったと記されるサマルカンドでコンサート、シルクロードの古都ブハラで音楽フェスティバルを開催する。首都タシケントで加藤九祚先生の卒寿を祝いパーティを行ないます。				

弁才天の系譜Ⅱアジアの音楽史を訪ねる音楽のシルクロードツアー

日本ウズベキスタン国交20周年／音楽のシルクロードツアー 90歳(卒寿)の挑戦カラテパ仏教遺跡発掘激励・遺跡保存支援

日本ウズベキスタン国交20周年交流実行委員会(実行委員長 加藤九祚)



【共催】：在ウズベキスタン日本大使館【後援】：在日ウズベキスタン大使館、ウズベキスタン文化省、ウズベキスタン文化芸術フォーラム基金、テルメズ市、ブハラ音楽大学

【協力】：テルメズ(中央アジア)仏跡発掘調査後援会、日本ウズベキスタン協会、オクサス学会

【旅行実施】：トラベル世界倶

【ツアーの特色】

- ① 琵琶奏者首藤久美子を初め日本とアジアの最高峰のミュージシャンが同行するコンサートツアー。
- ② 中央アジア最大の観光都市サマルカンド、ブハラでのコンサートを開催する。
- ③ 玄奘三蔵も訪れ、音楽演奏も行われたカラテパ僧院伽藍遺跡で即興演奏に挑戦する。
- ④ カラテパ僧院伽藍を発掘した、ウズベキスタン友好勲章受章者加藤九祚先生がご案内します。

【企画制作・事務局】特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ(江藤セデカ理事長)・愛川サライ(会長・支部長大野 遼)

本部住所：〒103-0022 東京都中央区 日本橋室町1-11-5 TEL: 03-5376-9343

支部愛川サライ住所：〒243-0303 神奈川県愛甲郡愛川町中津6314-1 TEL: 046-285-4895 Fax: 046-265-0167

大野遼携帯電話 090-3814-5322 E-MAIL: paf02266@nifty.ne.jp



イスマトフ・
バフチョル氏

ブハラ芸術大学副学長。2002年ユーラシアンクラブが招聘したウズベキスタンの民族アンサンブル「サシマコム」団員として来日。大野遼がブハラの石畳であった父イスマトフ・ボホディルさん（ギジャック演奏者、楽典シャシマコムの継承者）を助け、ブハラのミュージシャンをまとめてブハラ伝統音楽の継承普及に努めている。今回の20周年記念事業に先立つ2年前、加藤九祚米寿のコンサートツアーでは、ブハラから仲間のミュージシャンをひきいて合同コンサートを実現した。



橋本 岳人山

●幼少の頃より父橋本恒山より尺八指導を受けるほか、クラリネット、電子オルガンを学び、愛媛、四国の尺八コンクールで3年連続1位受賞後、1986年、都山流尺八大阪府コンクール1位受賞。都山流尺八全国コンクール金賞受賞。文部大臣賞受賞。1992年 都山流大師範に昇格。1997年 都山賞受賞。石川さゆりや浅岡雪路やフライブルグ市立交響楽団との共演など幅のある演奏活動を展開。愛媛大学非常勤講師。青年の頃、愛媛大学海洋学部の学生として津波の調査で南三陸町での実習経験がある。海に向き合い生きる希望を込めた「2011年3月11日 絆」を作曲し、昨年八月、ネパール、ウィグル、モンゴル、日本のミュージシャンと初演、感動を与えた。



パンチャラマ

●1970年ネパール・サララヒに生まれる。幼い頃から音楽や舞踊に親しみ、85年にプロとなり「バンスリの天才」と称される。ネパールを代表するミュージシャンとして、テレビ、ラジオを始め、その演奏やレコーディングは数千曲におよぶ。1stアルバムCD『チョウタリ』は、今なお、ネパールの人々に愛されている。ジャンルを越えたセッションで、世界のミュージシャンと共演。02年より、ネパールの子供達のための「チャリティコンサート」を開催し、収益金でネパール・サララヒの小学校を建設。ヒマラヤの大地に育まれた彼の音楽は、「大らかで素朴」「自然の空気的美しさに満ち溢れている」と日本でも圧倒的な人気を誇る。



サラバンラマ

●1993年に、ネパールの首都・カトマンドゥへ上京し打楽器の勉強を始め、97年「カジノ・アナ」での演奏をきっかけにプロ活動を開始。98年、イラバード サンギート マハビダヤ大学院・音楽科を卒業し、コンサート、ラジオ・スタジオのレコーディングで活躍。01年来日。以降、兄パンチャラマと共に日本で活動。02年リリースのさだまさしCDにも参加。ネパール多民族の持つ「数百通りのリズム」に精通し、その技術は「目にも止まらぬ指さばき」「人が対話しているよう」と評されてる。ネパール音楽に留まらず、世界のミュージシャンとも意欲的に共演している。



木村 俊介

●02年、第2回ADD三味線コンテスト・グランプリ受賞（弘前）05年、作品集CD「音象」をリリース05年、愛・地球博「日本伝統芸能十八撰」出演06年、アメリカ・カナダ・韓国・ネパール・イギリスなどで現地アーティストと共演06年、文化庁芸術祭参加「花柳鶴寿賀りサイタル」の音楽を担当06年～07年、坂東玉三郎演出・出演、鼓童「アマテラス」（歌舞伎座・京都南座他）に楽曲・詞を提供08年、ニューヨーク・ロサンゼルスにおいてコンサートを行なう。



首藤 久美子

●東京音楽大学卒業。在学中より薩摩琵琶を田中之雄氏に師事。NHK邦楽技能者育成会43期主席卒業。NHK邦楽オーディション合格。日本音楽集団入団。第39回日本琵琶楽コンクールでは第1位入賞し、文部科学大臣賞・日本放送協会賞を受賞。NHK教育テレビ「芸能花舞台」、NHK「邦楽のひととき」に出演。和楽器、洋楽器との共演など、多方面で活躍している。現在高崎芸術短期大学非常勤講師。

日本・ウズベキスタン国交20周年記念音楽のシルクロードツアー —アジアの音楽史が見えるコンサートツアー—

実施時期：2012年9月5日～12日

実施主体：実行委員長 加藤九祚

プロデュース：NPOユーラシアンクラブ会長 大野 遼

実行委員会構成団体：テルメズ（中央アジア）仏跡発掘調査後援会、日本ウズベキスタン協会、オクサス学会

共催：在ウズベキスタン日本大使館

協賛：ユーラシアンクラブ役員、会員、協力者多数

後援：ウズベキスタン文化芸術フォーラム基金

同行音楽家：橋本岳人山、木村俊介、首藤久美子、パンチャラマ、サラバンラマ

協力音楽家：イスマトフ・ボホディル、ブハラ芸術大学副学長イスマトフ・バフチョル

1. IsmatovBahodir (gidjak) 2. Ismatov Bahtiyor (pesnya) (karnay) (kayrok)3.Gulov Fazlitdin (tanbur) (rubob) 4.Temirov Obid (dutar) 5.ToshevNodir (konun) 6.Abbosov Mirzohid (nay, vleyta) 7.Shodiev Olim (doyra) 8.Ismatov Farruh (karnay) 9.Hudjaev Dilmurod (pesnya)10.Iskandarov Ismat (ud) 11.Kurbonova Kamola (tanes) 12.BahronovaGulnora (tanes)



2012. 9. 5～12にかけて行われたシルクロードツアーは団長 加藤九祚先生、五人のミュージシャン、ツアー参加者を含め19名で実施された。成田を夜8時50分に出発してウズベキスタンのタシケント空港に着いたのは夜中の2時だった。AM4:30 ホテルで朝食。タシケントから空路乗り継ぎテルメズへ。テルメズ空港で先に現地入りしていた団長の加藤九祚（きゅうぞう）先生と合流しました。



← 右は朝食を食べたホテルラウンジの
Welcome人形



↑上左は、テルメズ空港で一行を待ち受けた加藤九祚先生。↑上右は、テルメズのホテルから見える町並み。

←街角で見た子供たち



ホテルに荷物を置いてから遺跡へと向かう 最初の遺跡(カンピルテパ遺跡)



橋の床板はところどころない



遺跡に向かい橋本岳人山による尺八演奏

つぎはハキム・テルムジー廟の近くのアムダリア(川)を見る

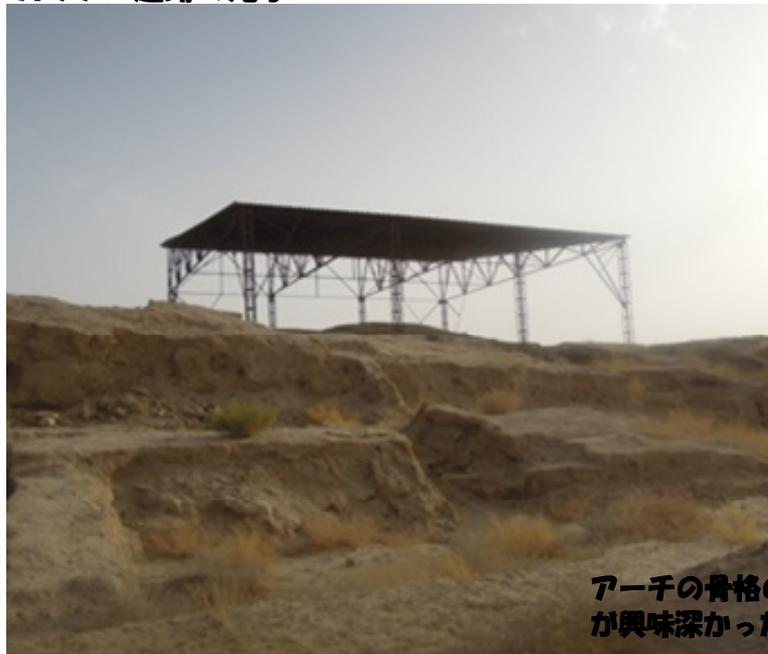


アムダリア ↑ 右岸のテルメズ地下僧院跡 ↓



仏教遺跡の瞑想の
穴が残っていた
この地で見学でき
たことは、テルメ
ズで発掘の功績の
ある加藤団長と旅
行会社の許可申請
手続きのおかげで
ある

カラテパ遺跡の見学



アーチの骨格が残っているのが興味深かった

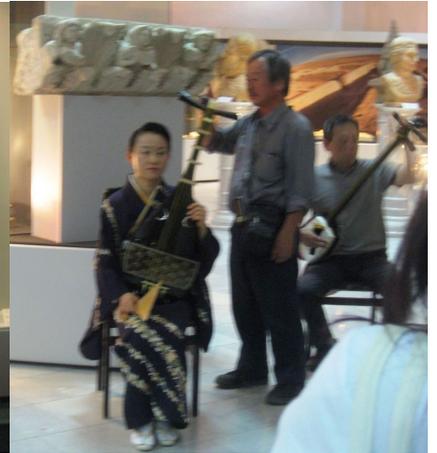


このあとよいよ、カラテパ僧院伽藍中庭での即興コンサートとなる



1700年前の昔も響いていたであろう祭典の音色。音楽のシルクロードがここから始まった

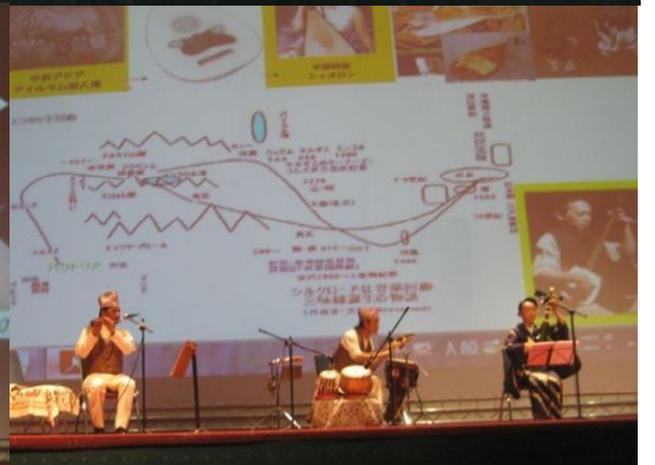
テルメス考古学博物館での演奏会



一九三三年にアムダリア右岸アイル
 タム遺跡で発見された「アイルタム
 楽人像」。棒状の撥で弾いているの
 は曲項四弦琵琶と想像される。薩摩
 琵琶の源流。撥は三味線に継承され
 ている。三日月の共鳴項が彫り込ま
 れている。



タシケント市の文化芸術フォーラム基金が運営する青年宮殿でのコンサート



ウズベキスタンと日本をつなぐ時空を超えた音楽の回廊。琵琶も笛も尺八も。演奏は最高の仕上がり。



ベートーヴェン

ルヴィンシュタイン

バラキレフ

チャイコフスキー

ムソルグスキー

芸術大学壁面の作曲家肖像



日本からの演奏者の紹介

加藤九幹先生挨拶

「遠くへ行きたい」をデュエットで歌う



フハラ芸術大学で音楽フェスティバル。ウズベキスタン文化大臣も視察に訪れ、演奏に満足して帰られた。



音楽フェスティバル後、フハラ旧市街レストラン屋上で夕食



暗くなりイスマトフさんの演奏で雰囲気最高



フハラ市内観光



アルク城



バスでフハラからサマルカンドへ移動



加藤先生の卒寿パーティ



サマルカンド最大の観光地
レキスタン広場
(右側メドレセ中庭がコンサート会場)



隋書卷八十三 康国(サマルカンド)「有大小鼓。琵琶。五弦」琵琶は曲項四弦琵琶、五弦は直項五弦琵琶。つまりサマルカンドにはペルシヤ系とインド系の琵琶がある、と記す。

レジスタン広場中庭でのコンサート。我々のために特別機材まで用意してくれた。



挨拶する加藤先生。



笛の音色に誘われて、鳥まで聴きに集まってきた。↓



黄昏のコンサートはムードも最高



晴れの舞台上で自作曲を、橋本岳人山、首藤久美子さんらと演奏。旅の最高の思い出になりました。



コンサートには現地滞在の青年海外協力隊の看護婦さんの姿も。



一生懸命「解説」してくれたウズベキスタンのベッキーことマリヤさん。若いシンガーソングライターです。ごろうさま。

メドレセの中は博物館や土産物店がある。



出合い 首藤久美子(薩摩琵琶演奏家)

首都タシケントから空路テルメズへ。テルメズ考古学博物館で、その像に出会いました。アイルタム出土の琵琶を弾く楽人像です。どこかペルシャを思わせる顔立ちの女性が、楽器を横に携え、優雅に演奏しています。それを見て、まず琵琶が瓢箪形をしているのに驚きました。そしてその楽器の表板にある三日月が、現在私たちが演奏している日本の琵琶のそれと全く同じ形をしているのです！そこで同行のミュージシャンメンバーと共に、琵琶もひとふしを演奏。話は戻りますが、まずテルメズに到着し、丘に登り、アムダリヤ川を見ました。ここは国境。向こう岸はもうアフガニスタンです。目前には鉄条網、背後には監視塔があります。夕方のアムダリヤ川は壮大でそれは美しく広がっていました。その昔、楽人がこの川を渡って琵琶を伝えたとのことのお話。その琵琶はアラビアのウードが祖先といわれ、シルクロードを通して、奈良時代に日本に入ってきました。正倉院にそのころの姿が今日に伝えられています。ちょうど同じ頃、九州では盲目の僧侶がお経を唱えるのに琵琶を携えていましたが、私の母親はその九州、大分国東の出身。母が子どもの頃、琵琶法師が楽器を背負い、家々を巡って、お荒神様にお経をあげていたそうです。九州では盲目の僧侶がお経を唱えるのに琵琶を携えていましたが、私の母親はその九州、大分国東の出身。母が子どもの頃、琵琶法師が楽器を背負い、家々を巡って、お荒神様にお経をあげていたそうです。私は幼い頃からピアノを弾いていました。高校生の時、たまたまラジオで聞いた世界の民族音楽に興味をもち、特にアラブや東南アジアの音楽を好んでよく聴いていました。その後、文楽やお能をみて感動し、自分は日本人だと自覚、大学に入学し、今の師匠の琵琶を聴いたのが出合いの始まり。在学中より舞台、録音、コンサートツアー等を通じて、様々な人との出合いに恵まれ、国内や海外で古典や新作を演奏し、紹介してきましたが、今回はまた違った意味で、琵琶のふるさとを舞台に、日本の音楽の源流に回帰したような特別な演奏旅行となりました。その琵琶にとってもゆかりの土地で、同行のミュージシャン、現地のミュージシャンの素晴らしい方々に出会い、共に演奏できたのは、本当に不思議なご縁で、今回のテーマともいえる「時空をこえて」という意味をふまえ、貴重で責任ある舞台でありました。ブハラの日暮れに浮かびあがる美しい古都のシルエット、道ゆく人々の鮮やかな色彩の衣服、広大にひろがる綿花畑、テルメズの灼熱の日差しと壮大なアムダリヤ川、そしてミステリアスなカラテパ仏教遺跡、サマルカンドで見たモスクの突き抜けるようなブルー、どこを見渡してもなぜか幻想的でエキサイティングな街でした。そして何より、今回の旅で一緒できたみなさんとの出合いが、この大切な演奏をこなす原動力となり、支えとなりました。感謝いたします。このたびの機会を与えてくださった大野遼氏にもこの場をかりて御礼申し上げます。この壮大なシルクロードの歴史の中で、日本のトラディショナルな文化をどう未来につなげていくか、私達には責務があります。日本の美が、日本という枠にとらわれず、中央アジア、ウズベキスタンにその源流をみつけたとき、この上ない喜びを感じています。

不思議な光景 栗林琢也

ウズベキスタン・ツアーは実に収穫の多い旅となりました。私は日本で西洋音楽の楽理から音楽を作曲する教育を受けましたが、邦楽器についてはあまり知識がありませんでした。今回の旅では、琵琶のルーツを、なんとウズベキスタンの遺跡に尋ねるということで、とても楽しみに参加しました。そして、ウズベキスタンのブハラ芸術大学を訪問に際しては、ウズベキスタンでは「ウズベキスタンの音楽」をどう考え、教育しているのか。それが何を指すか、外国に倣ったものか、自国の伝統音楽を指すのかを、ぜひ知りたと思っていました。琵琶については、中国の『灰陶加彩楽女』や『黄釉加彩楽女立像』が洋梨型の琵琶を手を持っているので、お隣の国同士、古来より似通った音楽を享受しているということ、大まかに把握していました。今回さらに西のテルメズのレリーフにもこの楽器が見られるということを知って、日本からテルメズまでの広範の空間に大きく横たわっている、琵琶の音楽の文化を視野に入れる必要があると解りました。琵琶をブハラ芸術大学で鑑賞できたのは、とても新鮮でした。ブハラ芸術大学の楽団が使用する弦楽器は、ボディは洋梨型(あるいはしずく型)ながらネックがとても長く、むしろ琵琶の方が、テルメズのレリーフに刻まれた洋梨型のそれに近く見えました。レリーフに近い形のもが日本にあり、ウズベキスタンには別の形のものがある。これはとても不思議な光景でした。私には琵琶の音色は、これまで聴いたよりも、豊潤で、異国的に響いて聴こえました。それは日本ではなくウズベキスタンで琵琶を聴いたからこそ、言い換えれば、日本の琵琶が、まさに自らのオリジンであるアジアの文化の真ん中に位置して、その体から豊かに音を放つことに立ち会えた、いわば楽器が備える要素が全て整合したような状態だったからこそ、感じたことかもしれません。ちなみに、ブハラ芸術大学のホールの壁には、音楽家の肖像が掛かっているのを発見し、教育内容の一端を推察することができました。作曲家の顔ぶれはベートーヴェンと、アントン・グリゴリエヴィチ・ルビンシテインと、バラキレフと、チャイコフスキーと、ムソルグスキーです。ベートーヴェン以外4人はロシア人で、ウズベキスタンがソ連邦の一国であったことが如実に現れていました。これが日本の音楽教室であれば、イタリア・ドイツ・フランスのバロック古典からロマンの作曲家がまんべんなく顔を並べているはずで、日本は明治以降、ずいぶん遠い地域の文化を取り込んだものですが、日本海が大陸と日本を地続きでなくさせている分、文化の流れの飛躍があっても適応して吸収してしまうのかもしれませんが、ウズベキスタンはソ連邦から独立して21年。今後どのような指針で音楽を教育していくのか、興味深いところです。レリーフの時代から今に到るまで、時間が流れて時代が移り変わりましたが、弦楽器の構造、弦を撥いて奏するという方法は、変わりません。私見ですが、レリーフを見たお陰で、この先の未来も、この楽器の音楽を奏する人と聴く人そのものの自体、そう大きな変化は起こらないのかも知れないという、何といたしましよ、悠然と安心したような心境になりました。多くを達観なさってこられた加藤先生という大人物が、側に同行なさっていたお陰かもしれません。大野遼さんが、十全に準備し、演奏家の方達とコーディネートなさったコンサートは、いずれの曲目も強い説得力をもって響きました。文化の歴史上の点と点を結び、私たちの目の前の空間に音楽を出現させ、共有したいという力強い意志に感服いたしました。また同行の歴史学者の先生方の、史実の調査研究への造詣の深さや、世界を股にかけたフィールドワークを軽々とこなすタフネスには、多大な勇気と励みを戴きました。また、参加されただの方も、古代史を語る眼差しの中に、これまでに様々な長い歴史を積み重ねて来た人間と、その人間の営みを愛する気持ちを備えておいでのように拝察しました。最後になりましたが、私の小品をレジスタン広場で演奏していただけたことは、まさに青天の霹靂でした。まだ未熟で正体の定まらない私に対して、しかし好奇心を持ってくださった皆様に、心から感謝しています。音楽を奏し、音楽に心身を委ね歌い踊り、人は言葉を越えた喜びを共感することを愛してきました。これから未来も同じはずで、ぜひ今回の旅で得たものを、次回の制作に活かそうと思います。重ねて深く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

サマルカンドは、『青の都』『東方の真珠』など多くの異名を持つ、シルクロードの十字路に位置するイスラムの色彩の濃い古都である。ウズベキスタンとの「国交20周年音楽のシルクロードツアー」の一行は、ブハラからバスに5時間余り揺られ古都に到着した。

世界遺産のレジスタン広場での合同演奏会の開催という悲願に、多大な努力と労苦を結集された大野さんや関係者の夢が実現した当日の演奏会が甦ってくる。

ウルグベク・メドレセの建物に足を踏み入ると、多くの聴衆で会場は熱気が漂っていた。ざわめきを鎮めるような尺八の重厚な音色が建物に反響する。切れ味鋭いバチさばきで、津軽三味線の乾いた糸から奏でる音が胸を打つ。琵琶の物悲しくも切ない弾き語りからは、祇園精舎の鐘の音が聞こえる。タイムスリップした邦楽の世界に、横笛とネパールのバンスリの音が共鳴し合う。タブラを巧みに操る指さばきに魅せられ、リズムカルな踊りを共演し、クライマックスに達すると、場内の聴衆からは手拍子が重なり、演奏家と一体となった。

ブハラの演奏家とのセッション、民族舞踊を舞う美しい女性、ライトアップされたワインカラーが、広場を包み込んだような光景になった一瞬、まさに「絆」の曲が合同で演奏された時、上空に一斉に飛び立ち周回した鳥たちこそ、歓喜のさえずりをひとときわ高く響かせたのである。

青の都、サマルカンドのレジスタン広場がひとときわ光輝く時、それは旅の終焉であり、ウズベキスタンとの新たな絆の序章であった。

加藤先生、古曳さん、大野さんをはじめ演奏家の方々、そして参加された多くの方々との素敵な出会いに感謝している。 KaTTa PaXMaT

たのしい勉強に 宮本裕

私はシルクロードの留学生を世話したり何度かシルクロード旅行をしてきました。これまで三蔵法師ゆかりの地を回って・西安(大雁塔)・新疆のトルファンの高昌国故城 ・キルギスのイシクル湖など見てきましたが今回はウズベキスタンのテルメズに行ってアムダリアを見たことは有意義でした。九十歳になってもなお元気でシルクロードの研究に、夜の宴会にも健在ぶりを発揮されていた加藤九祚先生に感動いたしました。私は新疆ウイグル自治区の留学生を多数世話してきましたが彼らから土産にもらったウズベキスタンの帽子と同じものをウズベキスタンのバザールで見ることができました。ウイグル人留学生の料理のポロ(プロフ)、シシカバブ、コルダック(肉じゃが)ナン、サムサなどはウズベキスタンにもあること、ラグメンはスープ付だったのがウイグルの汁なしラグメンとは違うことなど発見してきました。ブハラでホジャ・ナスレディンの像を見たので以前にも読んだことのあるトルコの民話のナスレディン・ホジャ物語路を改めて読みました。またこの機会に加藤九祚先生の本をはじめとする一連の中央アジアの本を読み、歴史や地理について勉強いたしました。豊富なイスラム建築を見ることができて、楽しい勉強となりました。 <http://structure.cande.iwate-u.ac.jp/uzbekistan/maegaki.htm>

ベストのツアーに便乗 秋野征子



日本ウズベキスタン協会の広報誌と一緒に送られてきた「音楽シルクロードツアー」を見て、あっこれに便乗しようと思い立って参加しました。ウズベキスタンとご縁が出来たのは、2年前の夏に次男がウズベキスタンからの留学生と結婚した時からです。故郷はサマルカンド、世界史の勉強をし直して中央アジアの現在を少しは理解できるようになりましたが、それでも未知の部分が多くありました。そして今年の夏、1歳になる孫娘を連れて里帰りした彼女と一緒に日本に戻るために、スケジュール的にはベストのツアーでした。さて、初日の訪問地テルメズでの即興演奏を聴いた時から、このツアーのテーマがはっきりと分かりました。また当地で長年発掘作業に携わっていらっしゃる加藤先生のご尽力に頭が下がる思いでした。そして各地で開催された音楽会では、プロの演奏を堪能して大満足でした。サマルカンドで40日ぶりに再会した孫娘を見て、周囲の愛情に包まれて過ごしていたことがよく分かりました。帰国してから関連資料を整理していると、実はネパールの音楽を数年前静岡岡市で聞いていたことが分かり、また昨年5月には静岡県立美術館で開催されたセミナーの資料に加藤先生のお名前を見つけて、本当にびっくりしました。今回のご縁に感謝しながら、ウズベキスタンのこれからは見届けたいと思っています。

脇坂幸子様 「色と音の旅」

ずっと以前よりいつの日にかサマルカンドブルーを見たい見たいと思い焦がれておりました。想いは届き今回の旅で思う存分ブルー(ビビハニムモスクのドーム・シャーヒズインダ廟等々)を目に焼きつけて堪能してまいりました。しかし、帰って来てから真っ先に浮かぶのはあの乾いた土のカラテパ遺跡の土の色です。そしてかつての僧院の庭で聞いた三人のそれぞれ異なった笛の音でした。尺八・篠笛・バンスリすばらしい奏者たちの即興演奏。青い空と何の色もない土と砂の中で聞いた音色は悠久の時を感じさせ、アレキサンダー大王がアムダリヤ川を渡り、玄奘三蔵法師が旅した時代を甦らせ、この地で仏教を学んでいた僧たちの姿までも浮かびあがらせてくれました。又、この灼熱のテルメズで十数年間も発掘作業をなさっておられる九祚先生の情熱、卒寿にして自ら本を背負われる先生のお姿に畏敬の念を禁じえません。又、又、始めて間近で聞いた薩摩琵琶の音色は、えもいわれないものでした。弁財天が「インド系サラスヴァティ」であるにもかかわらず手にしているのが「ペルシャ系の琵琶」であるという不思議な音楽のシルクロードの物語りに想いを馳せての演奏はロマンティックで幻想的な世界へと誘なわれました。アイルタム楽人像とかかわりのある薩摩琵琶・ネパールの指太鼓タブラ・ブハラの自宅で聞かせて頂いたギジャックの音。サマルカンドブルー・乾いた土の色・そしてすばらしい楽人さん達の演奏。色と音が重なり交わりウズベキスタンを強く印象づけた旅でございました。本当にご同行させて頂きKaTTa PaXMaT! (カッタ・ラフマツト)です。

【琵琶幻想—曲項四弦琵琶はソグド人が生み出した！】

大野 遼

—アジアを覆うペルシャ音楽の影響。曲項四弦琵琶には「月氏」のメッセージ？！—



● アジアを覆うペルシャ音楽の影響

アムダリアを北に渡った楽人を示すこの彫像の女性が手にする楽器の元になったのは、古代ペルシャの楽器「バルバット」とされる。棒状の撥をつまんで弾いている例が多い。

このバルバットの直接の子孫となる楽器が、トルコやアラブで「ウード」と呼ばれている楽器である。「アイルタム楽人像」や日本の薩摩琵琶などの「曲項四弦琵琶」とトルコやアラブの「ウード」は、バルバットを共通の祖先に持つ「兄弟の楽器」となる。

世界の民族音楽を研究した小泉文夫・元東京芸術大学教授は「西アジアの音楽は、今日、イランの音楽、トルコの音楽、アラビアの音楽、そして、イスラエルの音楽と大きく四つに分けることができるが、その大部分は古代のペルシャ音楽に源を発しており、国際的な民族間の交流によって相互に音楽文化を発展させてきた」とし、トルコの音楽で使用される楽器や理論の用語に、ほとんどペルシャ語が使われ、アラブの音楽の多数の文献がその源をペルシャに求め、ペルシャの学者たちがアラビア音楽の成立に多大な功績を残している、と指摘している。象徴的に言えばササン朝ペルシャ以前から発達してきた古代ペルシャの音楽を構成する楽器群や旋法が、西方では、トルコ、アラブ世界といった西アジアの音楽の基礎に影響を与え、東方では、中国や朝鮮、日本の音楽を形成しているともいえる。

「今日西アジアでもっとも広く用いられているウード（日本の琵琶【曲項四弦琵琶；筆者注】、ヨーロッパのリユート、さらにギターへ発展していった楽器の祖先にあたる）は、アラビア人が工夫し完成させたものと考えられているが、その源流は、ペルシャのバルバットという楽器にある。・・・アラビアの代表的楽器も、実はペルシャに源を発しているのである」（小泉文夫「民族音楽の世界」）

さらに歴史的には、7世紀に発生したイスラム革命の波がアジアを襲った際に、音楽的には、イスラム化した地域の音楽をペルシャ化したといったプロセスを刻み、インド（特に北インド音楽；ヒンドウスターニ音楽）にも影響を与えた。日本人としてだけでなく、外国人で唯一、ヒマラヤの聖者故ナードヨギ・D.R.Parvatikar師の教えを受け継いでいるシタール奏者伊藤公朗さんによれば、およそ700年前に、スルタンアッラーウディン（AD1296-1316）王朝の宮廷音楽家だったアミールホスローという人が、インド古典音楽の楽器ヴィーナ（女神サラスヴァティが奏でている楽器）に改良を加え、その当時ペルシャから伝来したセターラという楽器の長所を取り入れて誕生したのが、北インドのヒンドウスターニ音楽のシンボル楽器シタールである。

● アイルタム楽人像が作られたのは？

東アジアの曲項四弦琵琶普及の要となっているアイルタム楽人像が作られたのは、いつ頃であるのか、「アイルタム楽人像」の造像時期は重要である。残念ながらその年代は不明である。しかし、クチャ千仏洞などの西域仏教壁画や中国の雲崗、竜門石窟、隋書その他の古文獻から、「曲項四弦琵琶」が東アジアで出現する時期が、中国の南朝では6世紀の半ば（梁の簡文帝549-551）、北朝では、北魏宣武帝（499-515）以降の西域音楽の流行に伴うものであったように、5世紀後半からであったと考えられている。これはエフタルがガンダーラをグプタ朝から奪った時期と重なるのである。

バルバットとその直系の子孫ウードと、アイルタム楽人像と中国、日本の琵琶の間には違いが2つある。1点目は、バルバットやウードには、音の位置を示すフレットがないのに対して、中国や日本の「曲項四弦琵琶」にはフレットがあるということである。アイルタム楽人像は棹の部分が欠けており不明だが、フレットがあったと想像する。2点目は、これがフレットがあったということを想像させる理由でもあるが、曲項四弦琵琶には、「半月」状の共鳴孔を二つ持つということである。この二つの半月孔は、中国では唐代以降失われ、演奏法も撥を使った弾奏の代わりに、指で弾く奏法に変わったのに対し、日本ではアイルタム楽人像以来の撥で叩く演奏法が今日まで継続され、アイルタム楽人像の弾く琵琶の形状も半月状の共鳴孔も残したままである。私が、薩摩琵琶や雅楽の楽琵琶は、アジアで最もクラシックな楽器と呼ぶ理由である。

私の友人である、イランの伝統楽器を弾きこなし、伝統的な歌謡アーヴォーズを歌うシャー・サボリ・ハミドさんによると、もともと古代ペルシャ音楽では、弦楽器にはフレットがないのが普通の状態という。

イラン・ペルシャの音楽は、音律やメロディによる音楽の森といった体系を構成しており、その中で特に7つの大樹が、それぞれ特色ある音律を基礎（大樹の根）にした曲想によってこのペルシャ伝統音楽の楽典として継承されている。7つの大樹の一つ一つは「ダストガフ（手の場所）」といわれ、①シュール（気持ちが高揚する旋律の意味で曲に雰囲気がある）②ナヴォ（あるいはナヴァで悲しいことあるいは旋律ともいわれる）③セガフ（3つの場所）④チャハールガフ（4つの場所）⑤ラストパンジガフ（真の5つの場所）⑥マフル（メジャーな場所）⑦ホマユーンと呼ばれ、全体で「ハフトダストガフ」と呼ばれる。演奏者は、この7つの大樹の間を、枝から枝へ渡るように、自由に曲想を変えて、音楽の森を歌い歩く吟遊詩人であり、この集団をダルヴィシュと呼んだ。この瞑想する演奏者にとっては、音を規制するフレットは邪魔なものだというのである。

このフレットは何時誕生したのだろうか。私は、妄想仮説の一つとしてこう考えた。グプタ朝で、「五弦琵琶」を芸術的音楽表現とは異なる理由で、仏教的行事でより簡単に使用することになった時に最初に導入された。その後、エフタルがクシャーン朝の地域を支配するようになると、バクトリアからソグディアナ地域にいたペルシャ系の仏教僧と楽人は、ペルシャ系の弦楽器バルバットを元にフレットと半月孔二つを付けた曲項四弦琵琶を編み出し、大乘仏教の行事で演奏するようになった。

ここで、ペルシャ系の人々について触れなければならない。ペルシャ系の人々は、元アジアの北部草原地帯にいたアンドロノヴォ人が起源とされる。紀元前3千年のことである。この項は別途詳述するとして、ペルシャ系の人々はかつてアジア大陸に広く展開していたということだけ記しておく。今回の稿に必要なことは、2世紀半ばに、大乘仏教を普及する前提となる仏典を結集したクシャーン朝のカニシカ王に触れて、ペルシャ系の人と文化を記す。クシャーン朝はカニシカ王の時に最盛期を迎え、ガンジス川中流域、インダス川流域、さらにバクトリアなどを含む大帝国となり、北西インドのペシャワールを首都とし、西方パルティアと戦い勝利し、東方はネパールのカトマンズ、ガンジス川のパータリプトラまで支配を伸ばした。クシャーン朝が東西かつてアジア大陸に広く展開していたということだけ記しておく。今回の稿に必要なことは、2世紀半ばに、大乘仏教を普及する前提となる仏典を結集したクシャーン朝のカニシカ王に触れて、ペルシャ系の人と文化を記す。クシャーン朝はカニシカ王の時に最盛期を迎え、ガンジス川中流域、インダス川流域、さらにバクトリアなどを含む大帝国となり、北西インドのペシャワールを首都とし、西方パルティアと戦い勝利し、東方はネパールのカトマンズ、ガンジス川のパータリプトラまで支配を伸ばした。クシャーン朝が東西交易の要を押さえ、繁栄し、仏教を保護し（カニシカはほかの宗教も保護しているがこの稿では仏教に絞る）、各地に仏塔を建造し、グレコバクトリアの伝統を反映したガンダーラ様式の仏像を造った（ガンダーラ美術）ことで知られる。

クシャーン朝は、中国が秦帝国の頃、モンゴル高原から黄河西域、四川省から河西回廊地域まで展開していた「月氏」の後裔。「月氏」は、匈奴に追われ、先住民のサカ族を移動させ中央アジアのキルギスにいたところを、さらに匈奴に派遣された烏孫に討たれバクトリアに逃れ、アムダリア川（オクサス川）の北ソグディアナに落着いて「大月氏」と称し、アムダリアの南のトハリスタン（大夏）を征服。5翁侯（きゅうこう；部族）を置いて一帯を支配していたが、紀元前後に、その中から貴霜（クシャーン）翁侯がほかの4翁侯を滅ぼして誕生したのがクシャーン朝であった。

中央アジアには、唐代の中国で「昭武九姓」と呼ばれ、バクトリアの北ソグディアナを拠点とするソグド人がいたが、彼らも「月氏」の末裔であった。ソグド人は紀元前3世紀から2世紀にかけて、祁連山昭武城（今の中国甘粛省張掖市臨沢県）に住んでいた。ソグド人

は、康国(サマルカンド)、安国(ブハラ)などオアシス都市を形成し中国との交易に従事した商人集団であった。

要するに、バクトリアからインドまで支配したクシャン朝の支配層と、後には、エフタルや西突厥の支配下で交易に従事したソグド人は同じ「月氏」の末裔であった。

現代で言えば華僑のように、同じペルシャ系の商人集団として、クシャン朝からササン朝ペルシャ、エフタルから西突厥へと支配層が変わっても、自然にササン朝ペルシャで使用されていたバルバットという弦楽器を、仏教的儀式的演奏楽器として導入し、「月氏」の後裔であるソグド人が、仏僧となり、楽人となり、仏教伝播のスポンサーとなって大乘仏教東漸の主役になった。これが曲項四弦琵琶東方伝播の秘密であった。

仏教伝播というのは、宗教的行為であるが、宗教は普遍的に国家や商人などの経済的スポンサーをバックに行われてきた。ソグド人のオアシス都市、中国内外のソグド人集落などで交易に従事するソグド人商人がそのスポンサーとなり、大乘仏教の持つ護国教的側面を北魏、隋唐の支配層も利用しながら、持ちつ持たれつの関係で、仏国土を支えてきた歴史は否定できない。仏教とソグド人の歴史は古く、元寿元年(紀元前2年)に中国に初めて『浮屠(budda)教』=仏教を伝えたのも大月氏の使者であった(北魏の正史『魏書』積老志)。

ペルシャ学の大家故伊藤義教氏によれば日本に残るペルシャ人の足跡は数多いようだが、安如宝も忘れてはならない人である。中国・揚州の大明寺にいた鑑真を天平14年(742)、元興寺から派遣された普照と栄叡が訪ね、鑑真が授戒僧として日本へ渡る承諾を得る。5度の難破を超えて来日した鑑真と一緒にいたのが安如宝。彼は揚州のソグド人集落にいたもので来日後得度し、唐招提寺金堂の建築などに活躍、後に唐招提寺の住職になるが、彼が造像したと考えられる金堂薬師如来立像の左掌から銅銭三枚が見つけられている。誕生まもない子どもに口に蜜を含ませ、手に銭を握らせ膠で貼り付けるのが商人ソグド人の習慣。安如宝晩年の仏像建立で、ソグド人の本懐が露呈した形だ。安如宝は、日本に戒律を持ち込み大乘仏教の基盤を整えたのがソグド人であるとのメッセージを込めたと受け止めたい。

私は、ソグド人たちが、ササン朝ペルシャ以来のバルバットを仏教的儀式に使用する曲項四弦琵琶に仕立てるに際し、グプタ朝の五弦琵琶で使用されたフレットに加えて、敢えて「三日月」の共鳴孔をバルバットに加えたのではないかと想像する。それは、ソグド社会が捧持する大乘仏教を盛り立てる琵琶(曲項四弦琵琶)が、大乘仏教も含めてソグド社会のものであることをメッセージとして送るためであった。「月=三日月」は、「月氏」のトーテムとも考えられるからである。アイルタム楽人像の弾く琵琶の成立時期も自ずから限られてくる。それはガンダーラがササノクシャン朝からエフタルの支配に移行する5世紀前半の頃であったろうか。

今年が中央アジアのウズベキスタンが日本と外交関係を結んで20周年に当たる。それを記念し日本の特定非営利活動法人NPO法人「ユーラシアンクラブ」が、ウズベキスタンの古都で音楽祭を開く。最初のコンサートは9月6日、南部のテルメズ郊外にある仏教遺跡カラテパで開催する。カラテパは1~3世紀のクシャン朝が築

文化往来
き、唐の玄奘三蔵も立ち寄ったという大規模な僧院伽藍がある。日

←左は、日本経済新聞掲載紙。ほかに朝日新聞社、共同通信社が掲載・配信した。
→右は、ウズベキスタンの新聞紙面23面に掲載されたコンサートツアー紹介の記事の一部。

● 今回の日本・ウズベキスタン国交20周年記念音楽のシルクロードツアーは、朝日新聞社、共同通信社、日経新聞社と国内メディアに取り上げられたが、集客には苦戦した。しかしツアーを主催したトラベル世界の全面的な協力と私の親しい友人たちのカンパ、在ウズベキスタン共和国大使館共催負担金等のご協力で実現した。幸いにコンサートツアーは、テルメズ、タシケント、ブハラ、サマルカンド各地で反響も大きく、ウズベキスタンの新聞紙面(23面、在ウズベキスタン日本大使館提供)を飾った。

Сотрудничество

Концертный тур музыки Великого шелкового пути в связи с празднованием 20-й годовщины установления дипломатических отношений между Японией и Узбекистаном

Бизнес Вестник Востока 2012.09.05 стр. 2 (1)

Музыка Великого шелкового пути
Концертный тур музыки Великого шелкового пути в связи с празднованием 20-й годовщины установления дипломатических отношений между Японией и Узбекистаном



Александра ЖЕЛИХОВСКАЯ

【20周年ツアー決算書】

収入	
記念事業旅行協力費	1,673,865
大使共催館共催金	117,225
寄付金	255,000
赤字	57,152
合計	2,103,242
支出	
チラシ作成募集計費	66,895
事前調整費	278,862
音楽家国内交通費	85,620
音楽家旅行諸経費	1,671,865
合計	2,103,242

【あとがき】

ウズベキスタンでの催しは、奇跡的な復活を遂げて元気な姿を見せていただいた加藤九祚先生がおられて初めて実現した企画です。最高の演奏を披露していただいた5人のミュージシャン、在ウズベキスタン日本大使館、在日ウズベキスタン芸術文化フォーラム基金、ブハラ芸術大学の仲間のミュージシャン、とりわけ日本での留学生時代に一緒に活動したガイラットさん、シェルゾドさんら若い仲間の強力な支援を得て、加藤先生、参加者やウズベキスタンの聴衆に喜んでいただける成果を上げることができました。集客にご協力いただいたテルメズ(中央アジア) 仏跡発掘調査後援会日本ウズベキスタン協会、オクサス学会、日経新聞社、共同通信社、朝日新聞社ほかメディアの皆様、催行定員に達しなかったにもかかわらずツアー実施に踏み切っていただいたトラベル世界さん、不足する活動費をご寄付いただいた多くの皆様に深く感謝致します。また、本報告書作成に当たり宮本裕先生の作成されたH.Pより資料提供頂きました。写真提供いただいた山本悦夫様ほか皆様の御蔭をもちまして大変遅くなりましたが発行までこぎつけることが出来ました。どうもありがとうございました。今回訪問した、テルメズ、タシケント、ブハラ、サマルカンドは5,000年の歴史を持ち古代文化を残し、復興させた独特の雰囲気を持つ街です。その中で新しい文化を育て、人々は明るく、人見知りせず、積極的に語りかけてくる。この国は物心両面で大きく動いている。その変化をずっと見ていたい気がします。(編集担当; 永田真一、大野遼)

2012年4月、東日本大震災被災地支援報告集会

8月、中華人民共和国内モンゴル自治区東スニット旗民間代表団

「第3回中津川弁財天愛川町音楽祭—アジア・シルクロード音楽フェスティバル 弁財天幻想」開催

9月、日本ウズベキスタン国交20周年・加藤九祚先生卒寿記念・ユーラシアンクラブ創設20周年

—音楽のシルクロードコンサートツアー in ウズベキスタン

10月、住民提案型協働事業「水の里愛川—ホッとする空間『中津川水辺プロジェクト』」提案

11月、第2回中津川モンゴルフェスティバル開催（実行委員長中島良一・両向区長）

12月、協働事業提案申請取り下げ

2013年2月、愛川町山田富雄町長に面会、協力要請

ホッとベンチキット教室スタート

3月、7日中津小、田代小でウルゲン鑑賞教室

30日、ラビンプラザで篠笛教室

2012年度の愛川町での活動は、第3回中津川弁財天愛川町音楽祭は、琵琶のシャオロンが気持ちよく参加してもらえ、パンチャラマの天才的バンスリ演奏とチョウタリバンドの高度で楽しい演奏で盛り上がり、愛川高校OBOGの笛と太鼓の演奏、妙誠寺の伊藤智久住職の龍笛が全体を盛り上げ、聴衆を喜ばせ、高度なシリーズ音楽祭として定着してきた。宮ヶ瀬ダム周辺振興財団とモンゴルブフクラブとの共催、中津川モンゴルフェスティバル実行委員会の主催で、より広範な町民が参加し大成功を収めた。また2年前発足したまちづくりネットワーク中津川は、水辺プロジェクトの第一歩と位置づけた「ホッとベンチ」の制作が始まったことで、軌道に乗り始めた。三年前に受け入れたロシア連邦サハ共和国の児童太鼓グループ「テティム」(18人↓写真)が7月26日から8月5日まで愛川町愛川高校で金子竜太郎（元鼓童トップミュージシャン）氏の和太鼓研修を受ける。



● 8月3日、愛川町農業構造改善センターで「第4回中津川弁財天愛川町音楽祭 笛と太鼓のフェスティバル」が開催される

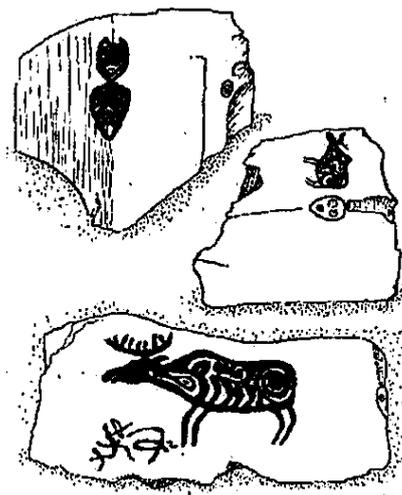
● 10月12日、神奈川県立あいかわ公園で日本最大のモンゴルフェスティバル(モンゴル文化教育大学、モンゴル・ブフ・クラブ、ユーラシアンクラブ3団体創設20周年記念)が開催される。

● 今後の「地域拠点型」活動は、日本橋での活動を軌道に乗せることが課題となった。

【本部移転、役員体制の一新、大野遼は退任し、江藤セデカ理事長、バーボルドー副理事長に就任】

小会議室を確保してから多彩な活動の拠点になっていたものの、発信力に限界を感じていた。アジアの音楽を通じた理解促進活動を通して、「日本橋は、シルクロードの時空を超えた終着駅」と語れるようになった中、一度は日本橋へのユーラシアンクラブの本部移転を真剣に考えるようになった。その結果あるウイグル人を通して日本橋室町一丁目でアジアの古布ギャラリーを営む齋藤桂子さんの知遇を得て、ギャラリーを本部会議室に使用させていただくことを快諾された。こうして念願の本部移転が2010年4月1日付で実現した。また中央区のボランティアサポートセンターに参加するとともに、小会議室は2011年2月付で閉鎖された。

こうして日本橋への本部移転が完了した中、まず2010年の総会で、日本人ばかりの理事を変更することを目的に、江藤セデカ、バーボルドーが副理事長に就任、副理事長4人体制に移行し、サハ共和国のジミートリーが理事となり、新旧役員が意見を常時交換する総務委員会を設置、2012年の総会では、理事への若手の登用を含め、「日本人クラブ」からの脱皮を図る最終決定として理事長に江藤セデカ、副理事長にバーボルドー（富川力道）が全員一致で推薦された。大野遼は、引き続き出来る範囲で新執行部を支えるため会長に就任した。



【シカチアリヤン支援の最終調整】

2008年7月、シカチアリヤン村青年研修唐で事前調査—北海道美幌町を原チャリで訪問

10月、アンコールワット拓本保存会がシカチアリヤンで岩絵拓本採取

※ シカチアリヤン村にはロシアへの入国禁止は、村民に心配をかけないために伝えず。

2012年12月、「300人の村の古代絵画展」2015年5月に開催決定。

2013年4月、ユーラシアンクラブ創設20周年の集い

ビクトリア・ドンカンさん招待

ベンチをコミュニティスポットに！ 愛川町ホットベンチプロジェクト まちづくりネットワーク愛川始動



企画書【日本最大のモンゴルフェスティバル】

第三回中津川モンゴルフェスティバル

三団体（モンゴル・ブフ・クラブ、モンゴル文化教育大学、ユーラシアンクラブ）
二十周年記念合同イベント

愛川町の皆様のご支援とご協力のおかげをもちまして、中津川モンゴルフェスティバルが今年で三回目を迎えます。これはひとえに地元の皆様と在日モンゴル人との友好交流と相互理解の賜物であります。今年、愛川町との友好都市提携を希望している、内モンゴル自治区・東スニッド旗の友好都市参加を表明しているほか、モンゴル国の首都ウランバートル市にある、モンゴル国文化教育大学も参加予定であり、中津川モンゴルフェスティバルの日本における最大級の日本モンゴル文化交流イベントと見込んでおります。愛川町の素晴らしいモンゴル文化の面白さを海外へ発信し、文化の振興、観光事業の促進に寄与したいと考えています。そしてこの祭りが町おこしのイベントとして定着することを期待し願っています。

2013年10月12日

期日：2013年10月12日（土）、雨天順延
場所：神奈川県立あいかわ公園 参加無料
● 12日午後6時から、愛川町公民館ラビンプラザで3団体合同20周年記念イベント
内容：モンゴル相撲「ブフ」大会（64名トーナメント；昨年度までは16名トーナメント）、遊牧民の住居ゲルの組み立て、民族衣装、モンゴル料理、モンゴル音楽、モンゴル舞踊、愛川町遊2バンド、愛川高校和太鼓部OBOGパフォーマンス、日本雅楽演奏、日本舞踊など
特別招聘：日本の国技大相撲からモンゴル人力士
モンゴル国民族舞踊団
中華人民共和国内モンゴル自治区東スニッド旗代表団

主催：中津川モンゴルフェスティバル実行委員会
共催：宮ヶ瀬ダム周辺振興財団、モンゴル・ブフ・クラブ、モンゴル文化教育大学、NPOユーラシアンクラブ、愛川サライ、カムインタラ、イーグル・アフガン復興協会、日本ウェルネススポーツ大学格闘技部 その他
協賛：ジャパンニューアルファその他
協力：半原行政区長会（昨年）、財団法人織産業会、まちづくりネットワーク中津川、ひまわり会、愛川町自然観察会、仙台下クラブ、遊2バンド、愛川高校和太鼓部 OBOG ユニット、日蓮宗第三部雅楽部

2013年8月3日

箆と太鼓のフェスティバル

中津川自然財天第4回愛川町音楽祭



日時：8月3日（土）開場午後2時
開演午後2時半
場所：農産物直売センター
チケット：大人2500円
（前売2000円）
小中高校生無料（先着250名限定）
申込方法は裏面に記載
問い合わせ先
NPOユーラシアンクラブ・愛川サライ
住所：愛川町中津6314-1
電話/Fax046-285-4895
090-3814-5322（大野達）
paf02266@nifty.ne.jp

半原・宮本区のお雑子
アジアの時代 未来を子どもに託す
シベリアの大地の音を音楽にしたハトラエフ夫妻
↓愛川高校和太鼓部OBOG
↑シベリア・ヤクーツクから愛川町に和太鼓の研修に訪れたサハ・テティムの子供たち
↑日蓮宗第三部雅楽部の皆さん
主催：箆と太鼓のフェスティバル実行委員会
後援：愛川町 愛川町観光協会 愛甲商工会 愛川町法人会
協力：愛川高校和太鼓部 まちづくりネットワーク中津川 織産業会
ひまわり会 仙台下クラブ 愛川自然観察会 半原まつり研究会・半原清流太鼓
カムインタラ イーグル・アフガン復興協会 モンゴル・ブフ・クラブ
企画制作：NPO法人ユーラシアンクラブ・愛川サライ



発行：特定非営利活動法人ユーラシアンクラブ理事長 江藤セデカ 住所：〒103-0022 東京都中央区日本橋室町1-11-5 TEL：03-5376-9343 支部愛川サライ〒243-0303神奈川県愛甲郡愛川町中津6314-1 TEL：046-285-4895 FAX：046-265-0167 E-MAIL：paf02266@nifty.ne.jp 郵便振替：00190-7-87777ユーラシアンクラブ お振込の場合：ゆうちょ銀行〇一九店 当座預金 0087777 ユーラシアンクラブ 会費、ご寄付はこちらへ。会費は正会員年間1口3,000円、学生会員1,000円、賛同会員2,000円。一口以上のご協力をお願い申し上げます。
<http://eurasianclub.org/>